

〔実践報告〕

アラバマ大学Capstone College of Nursingと 千葉大学看護学部 of 学生交換プログラム 「異文化看護演習」の総括と展望

野崎 章子¹⁾ 高橋 秀夫²⁾ Suzanne Prevost³⁾ 岩崎 弥生¹⁾

Summary and prospect of student exchange program “Transcultural Nursing” between the Capstone College of Nursing, University of Alabama and the School of Nursing, Chiba University

Akiko Nosaki¹⁾, Hideo Takahashi²⁾, Suzanne Prevost³⁾, Yayoi Iwasaki¹⁾

要 旨

千葉大学看護学部は1998年より「異文化看護演習」Transcultural Nursing (TCN) プログラムとして、大学間協定校であるアラバマ大学タスカルーサ校看護学部Capstone College of Nursing (CCN) と学生交換プログラムを開始し、双方の関係教職員・協力者らの多大なる努力によって、約20年にわたり運営・継続されてきた。本学部よりCCNへ、TCN参加者として、1998年より2015年まで17回にわたり計215名の学生を派遣した。同プログラムの内容は当初講義・施設見学中心であったが、CCNの校舎移転等に伴い、より臨床実践的なシミュレーターラボでの演習や現地学生との臨地実習“clinical immersion”へと変遷した。本学部においてもCCNより計6回22名の学生を受け入れた。この受け入れプログラムは2001年より開始され、他大学学生受け入れ時プログラムの標準モデルとしてその後も活用されているが、TCNにおいては派遣プログラムと同様に、CCN学生と本学部・研究科学生との教育的相互交流の増加等の変更を加えてきた。成果としてTCN参加学生の留学や本研究科教員をも含めた交流機会の増加等があり、TCNプログラムはCCNおよび本学部・研究科双方に寄与してきた。今後の継続とさらなる発展をめざし、関連教職員等関係者の負担軽減のための調整や資源の整備等が必要である。

Key Words : 異文化看護, ダイバーシティ, グローバル人材, 留学, 交換プログラム

-
- 1) 千葉大学大学院看護学研究科
 - 2) 千葉大学国際教養学部
 - 3) Capstone College of Nursing, The University of Alabama
 - 1) Graduate School of Nursing, Chiba University
 - 2) College of Liberal Arts and Sciences, Chiba University
 - 3) Capstone College of Nursing, The University of Alabama

Abstract

The School of Nursing, Chiba University (CUSON) and the Capstone College of Nursing (CCN), University of Alabama, have been operating a student exchange program as part of the “Transcultural Nursing” (TCN) program since 1998, and have continued it through considerable efforts from faculty members and the cooperation of stakeholders.

CUSON sent 215 undergraduate students to CCN as participants of the TCN program from 1998 to 2016 on 17 occasions. The contents of the program have changed from lectures and visits to medical facilities to more practical curricula, such as clinical practicums in the simulation lab at CCN and a practical program called “clinical immersion” at medical facilities for the pairs of CCN and CUSON students. The program has been offered by CUSON for CCN students in Chiba since 2001, and 22 students have been sent by CCN to CUSON on six occasions from 2001 to 2013. The contents of the TCN program for CCN students have also changed from mainly facility visits to more opportunities for interaction with the students and faculties of CUSON, including sessions about topics such as healthcare, nursing education, and research interests. The TCN program has enriched the students and faculties of both of CCN and CUSON, and is expected to be continued and further developed in the future.

Key Words: transcultural nursing, diversity, globally competent human resources, study abroad, student exchange program

I. はじめに

千葉大学看護学部においては、異文化に身を置き、当該文化に固有の生活様式や医療・看護の現状、様々な文化背景をもつ人々の健康や病気に対する反応等を学び、文化的感受性を涵養することを目的として、1998年より「異文化看護演習」

(Transcultural Nursing, TCN) プログラム提供を開始した¹⁾。これは、3年次学生対象の2単位60時間、後期集中の自由科目であり、大学間協定校であるアラバマ大学タスカルーサ校看護学部 Capstone College of Nursing (CCN) に学生を派遣するプログラムである。当初より、現在の地域創成看護学教育研究分野精神看護学専門領域である成人老人看護学講座精神看護学教育研究分野が科目責任分野となり、1998年より2016年まで19年にわたり、計17回、215名の学生を派遣してきた。また、同TCNの交換プログラムとして、CCNの学生計22名を6回にわたり本研究科に受け入れ、学部・研究科の教職員および学生さらには他部局や関連施設より多大な協力を得て、多様なコンテンツを提供してきた¹⁾。

異文化看護を包含する国際看護教育²⁾は、2009年度より看護師養成所の指導要領に導入されたが、それよりも約10年早く開始された本TCNプログラムの目標は、1) 文化が健康信念や保健行動に及ぼす影響の理解、2) 日本の医療・看護の現状と課題、医療・看護へのアクセスの状況とアクセスの阻害要因、日本人の社会文化的背景と健康習慣についての発表・討議、3) 地域の保健

医療施設における文化的に配慮した看護の適用、4) 文化・看護の多様性と共通性の理解と今後の看護への活用である。

折しも、2013年には閣議決定においてグローバル人材の養成・確保の方針が打ち出され³⁾、千葉大学は2014年にスーパーグローバル大学として採択された。このグローバル人材の定義⁴⁾は本TCNプログラムが目指す人材像との共通性が多く、本プログラムは同人材育成に寄与するプログラムであるともいえる。

本稿においては、これまで約20年間にわたり継続してきたCCNへの学生派遣プログラムである「異文化看護演習」ならびに同CCN学生を千葉大学看護学部・研究科に受け入れてきた交換プログラムの内容および変遷等について、実施者の立場から総括し、成果と課題、そして展望について記述するものである。

II. 学生交換プログラムの概要

1. 「異文化看護演習」としてのCCNへの千葉大学看護学部学生派遣プログラム

まず、授業科目である「異文化看護演習」の経緯ならびに内容について概括する。このTCN交換プログラムは、受け入れる側が各年について実施するかどうかを決定する。1998年から2014年までは、CCNと同大English Language Institute (ELI) の共同にてTCNプログラムを提供しており、同時多発テロ翌年の2002年以外は、毎年開催された。2015年よりCCN単独によるプログラム

実施となり、同年には参加希望学生が少人数という理由で開催されなかった。1回あたりの参加学生数は6～19人であり、原則として科目責任分野の教員1名が引率した。派遣時期は毎年2月下旬より約12日間、実際には学習日数9～10日間程度のプログラムであり、両大学の担当教員は、プログラムの5ヶ月前の前年9月より協議しつつ準備を行う。以降、参加学生の事前・CCN現地・事後の学習課題内容および変遷等を記述する。

事前学習では、既報¹⁾の日米両国の保健医療、看護教育等に加え、アラバマに頻発する竜巻等の災害発生時の対処や、2013年以降はCCNの授業において現地学生に対するプレゼンテーションを行っており、その準備も課題とした。同大学タスカルーサ校には、千葉大学の全学教育センターのプログラムとしても学生派遣を行っており、その担当教員である国際教養学部の高橋らと事前に情報交換を行い、また、高橋らが開発した、実際にCCNにて撮影した動画を用いた看護領域に特化したCALL英語教材⁵⁾を用いての学習も加えた。

CCN現地では、参加学生はキャンパス内の学

生寮にて現地学生とともに生活したが、学生寮の空室不足等から2014年より学外のホテル滞在となった。現地でのプログラム内容について、2002年の既報¹⁾にその後の変更等を加筆し、表1に示した。当初は、現地教員によるTCN学生だけを対象とする講義、病院やリハビリ施設見学、週末にはホームステイなどが組まれていた。その後、CCNは2010年に他部署との共用の校舎から、現在の占有の新校舎に移転した。シミュレーションセンターを内包し、6つのMETI社製の高機能患者シミュレーターと専用ラボ、2名の専任のオペレーターの他、34床のラボやテレヘルスの設備を有する。同時にNurse Practitioner (NP) やDoctor of Nursing Practice (DNP) の資格を有する教員数が増加した。こうした変化もあり、プログラム内容に高機能患者シミュレーターを用いた現地学生の看護技術演習の見学、および実際のシミュレーターでのハンズオン演習が組み込まれた。さらに2013年よりCCN学生と1対1でペアとなり半日の臨床実習を行う“clinical immersion”が提供された。講義ではCCNの正規授業に参加

表1 CCNにおけるプログラム内容

プログラム内容	
オリエンテーション・キャンパスツアー	・キャンパスの紹介、キャンパス内バスルートと乗り方 ・安全、特にキャンパス・ポリス等 ・災害時の対策、特に竜巻発生時の対応、行動
講義・ディスカッションのクラス	・各教員による文化に配慮した看護の講義 ・英会話クラス (ELIの教員) ・CCNの授業への参加 ・教員懇談会に参加 ・NP (Nurse Practitioner) の役割についての講義 ・APN (Advanced Practice Nurse) 資格者の教員との懇談会
プレゼンテーション	・現地学生の授業において、40分間のプレゼンテーション
学部内施設見学・演習	・シミュレーター演習 (清潔操作、注射、点滴等) ・現地学生のシミュレーター演習の見学 ・テレヘルス見学
医療関連施設見学	・総合病院の見学 (救急部門ED、検査部門、新生児室、陣痛分娩回復室LDR、一般病棟、調剤ロボット、ドクターヘリ) ・リハビリテーションセンター ・大学内のケア付き高齢者居住施設
臨地実習	・HIPPA (Health Insurance Portability and Accountability Act) についての学習、誓約書へのサイン ・“Clinical Immersion”として、現地学生と1対1でペアとなり、障害児施設あるいは高齢者施設にて実習
その他大学内施設見学	・フットボールスタジアム/ミュージアム/図書館/他学部/クリニック/フィットネスジム
教職員・学生との交流	・歓迎会、夕食会、昼食会、送別会 ・大学内でのイベント (大学内でのスポーツの試合、コンサート、オペラなど)、週末の外出
地域住民との交流	・週末のホームステイ/スポーツ観戦/教会行事に参加
その他	・日々の学びを英語で記録し、CCN担当教員に提出

し、現地学生を対象とする英語でのプレゼンテーションを組み入れた。2015年には“Mental Health in Japan”と題して40分のプレゼンテーションを行った。また同年にはNPやDNP資格を有する教員との懇談を持ち、Registered Nurse (RN) との教育・実践内容の違い等について説明を受けた。このように、より現地学生との教育的な交流が増加し、内容も臨床実践的なものへと変化してきた。見学では、CCNの向かいにある実習病院でもあるDCH Regional Medical Center, キャンパス内の大学所有のケア付き高齢者施設の他、キャンパス内にて開催される大学対抗のスポーツ観戦等が加わった。同大学はキャンパス内に10万人収容のフットボールスタジアムを所有しており、現地のタスカルーサ市の人口は約8万人であるが、試合日にはキャンパス内人口は14万人になるという。他競技の試合も平日の夕方や週末に開催されており、同大の学生のみならず周辺の家族連れ等で満席となる。つまり、同大学のスポー

ツやイベントが周辺住民のレジャーであり、重要な観光資源となっている。キャンパス内に高齢者施設が作られるのも同様の理由であるという。生活におけるスポーツの意味や、地域における大学の役割、地域との連携等についても学ぶ機会となった。

帰国後の事後学習では、参加学生全員による報告書作成・提出および他学生に向けての報告会を課題としている。2016年開催の報告会では、千葉大学看護学部・研究科全体のグローバル化推進をめざし、他のスタディツアーや個人旅行で海外の医療施設を訪問した学生らと合同にて、学生および教職員も対象として企画・実施した。

2. アラバマ大学CCN学生の千葉大学看護学部・看護学研究科への受け入れプログラム

受け入れプログラムは「日本のヘルスケアを学ぶ」という主題にて、2001年より提供され、その後は2005, 2006, 2008, 2010, 2013年に実施された。1回あたりの参加学生数は3～5名であるが、

表2 CCN学生受け入れプログラム内容 (2013年)

日	午 前	午 後
初 日	9:30-オリエンテーション 10:00-キャンパスツアー (ボランティア学生/教員) 11:40-ダンスサークル舞部の演舞	12:00-昼食会 (歓迎会) 【教員/学生約30名】 13:30-千葉大学医学部附属病院見学 (成人看護学) 16:00-看護学研究科教員懇談会参加 【全教員】 16:30-文化交流 (七夕, 書道, 折り紙等) / 夕食会 (手巻き寿司/お好み焼き等) 【ボランティア学生/精神看護学約15名】
2 日目	10:20-助産院見学 (リプロダクティブヘルス看護学)	14:00-医学部附属病院地域医療連携部見学 (地域医療連携部/訪問看護学) 16:00-地域看護学領域教員/院生とのミーティング (日本の地域保健/研究紹介等) (地域看護学) 17:30-夕食会 (ボランティア学生)
3 日目	10:30-医学部附属病院小児科病棟見学 (小児看護学) 11:30-医学部附属病院精神神経科病棟見学 (精神看護学)	16:30-着物着付け教室での着付けとお茶会 (国際教養学部高橋/精神看護学) 18:30-夕食会 (ボランティア学生/国際教養学部高橋/精神看護学)
4 日目	週末旅行 横浜訪問 (精神看護学)	
5 日目	週末旅行 皇居/明治神宮/東京江戸博物館訪問 (精神看護学) 【ボランティア学生6名】	
6 日目	11:00-医学部附属病院病理部門見学 (看護病態学)	14:00-生体看護学領域教員/院生とのミーティング (研究紹介等) (生体看護学) 16:00-災害看護学領域教員/院生とのミーティング (アラバマ大における遠隔教育, 研究紹介等) (災害看護学)
7 日目	10:00-学生/教員とのミーティング (日米の看護師養成システム比較/NPの実践紹介) (健康管理学/看護システム管理学) 【学部生/院生/卒業生等約15名】	14:00-千葉県看護協会訪問 (健康管理学/看護システム管理学) 15:00-ちば県民保健予防財団訪問 (健康管理学/看護システム管理学)
最終日	10:00-台東区の路上生活者支援NPO山友会/同クリニック, 訪問看護ステーションコスモス訪問 (精神看護学)	13:00-浅草観光 (精神看護学) 18:00-送別会 (CCN学生による学びの発表, 音楽部演奏等) (学術・国際活動委員会/精神看護学) 【学生/教員約50名】

() 実施内容, あるいは担当者, 【 】 担当・参加者数概算

引率教員や学生の家族が同行することもあった。期間は7月中旬の約10日間である。開始当初は、当時の看護学部国際交流委員会が中心となり精神看護学教育研究分野が窓口となって実施され、各教育研究分野が講義や施設見学の提供を行った¹⁾。その後、精神看護学教員が連絡調整を担当し、CCN学生の要望に応えかつ千葉大学看護学部・研究科の学生・教職員との学術的交流推進を目的として、講義や施設見学中心であった内容に、表2に示すように、両校の学生および教員が相互に発表と討議を行うセッションを加えた。特に2013年にはCCNのDNPコース所属のNPである大学院生が参加しており、千葉大学看護学部・研究科学生、教員、卒業生に対し、NPの資格取得ならびに実践等についての講義を行った。本学部・研究科の外国人学生も含めて、活発な意見交換が行われた。施設見学については時間をとって現場スタッフとディスカッションを行う機会を設けた。また先進の保健医療施設のみならず、精神看護学領域の実習フィールドでもある生活困窮者の多い山谷地区への訪問を加え、困窮者対象の無料クリニックに勤務する米国人看護師との懇談の機会もあった。プログラムの運営については、教員のみならず、かつてTCNに参加した学生や将来参加したいという学生、英語が苦手だが交流したいという多くの学生ボランティアが携わった。教員との接点として、全教員が参加する教員懇談会への参加も含めた。文化交流の一環である七夕行事実施については、当時の事務職員が構内より自生の笹を調達するなど、千葉大学看護学部・研究科全体での運営となった。また高橋の手配により、着付け教室において着物の着付けとお茶会も経験することができた。

宿泊については千葉大学内の宿泊施設不足によりホテル滞在が殆どであるが、千葉県において高校総体が開催された年にはホテルが確保できず、教員および一般住民のボランティア宅での滞在となった。

Ⅲ. 総括と今後の展望

1999年より、約20年にわたり学生交換を行ってきたTCNプログラムでは、CCNならびに千葉大学看護学部・大学院看護学研究科の双方において、講義・交流・施設見学といったコアのプログラムが確立してきた。受け入れプログラムについても、2001年には研究科を挙げて手探りで開始されたものが標準モデルとなり、その後の本看護学研究科におけるShort Stay Short Visit (SSSV)

プログラムの際に活用された⁶⁾。この標準モデルを基盤として、時代や各大学の方針を反映し、それぞれの強み、例えばCCNのシミュレーターラボやNP、本研究科の多様な実習関連施設訪問等を生かして、より広いscope（範囲）へ、より高いadvancedなレベルへと内容が変遷した。成果としては、CCNに赴いた学生の多くは、文化や生活の違いのみならず、日本円にして億単位の学部内シミュレーターラボとそれを用いた演習を目の当たりにし、看護教育方法の多様性・可能性や要求される臨床能力の高さへの気づきや驚愕・衝撃を経験した。これらの経験が後の米国の大学院への進学や、現地学生との交流継続につながっている。担当教員はこれらの実践を広く社会に発信し^{7) 8)}、貴重な教育資源として知らしめてきた。また交換プログラムであることによる学生の交流、つまりTCN参加後にCCN学生来訪時のボランティアを行う、あるいはボランティアで千葉にてCCN学生と交流した後に次回のTCNに参加するといった良い循環となっている。CCNもやはり学生交換でのプログラム実施を希望している。CCNは複数国に演習として学生を派遣しているが、海外から学生を受け入れているのは千葉大学看護学部のみである。

本プログラムの今後の継続と充実のためにも、担当教職員の負担の軽減、費用や学内の宿泊施設等の整備・調整が必要である。また、CCNでの高度看護演習、プレゼンテーションやclinical immersion、そして千葉大学でのCCN学生との交流に向け、学生および教員は看護技術演習および臨地実習を行える程度の英語力に加え、自国の文化・歴史を英語で説明できる知識とレディネスが要求される。自身が千葉大学看護学部においてどのような科目について学び、どの診療科において臨地実習を終えたのかということを英語で説明できない学生は少なくない。基礎的な英語力に加え、臨床の英会話力や保健医療システム全般についての知識等の準備も課題であり、教育環境を整えていく必要がある。

以上のようにTCNプログラムが起点となって千葉大学看護学部・看護学研究科のグローバル化が推進され、そして今後取り組むべき課題も明らかとなった。今後も本交換プログラムが継続され、より充実した、派遣する側・受け入れる側の双方に資するものとなることが望まれる。

謝 辞

本TCNプログラムの実施に当たりまして、以

下の関連の皆様にご礼申し上げます。Dr. Sara Barger, Dr. Linda Olivet, Dr. Susan Gaskins, Dr. Melondie Carter, Dr. Marilyn Handley, Dr. Monika Wedgeworth, Dr. Kay Sackett, Dr. Theresa Wadasをはじめとするアラバマ大学Capstone College of Nursingの教職員ならびに学生の皆様, Dr. Teresa Wise, Dr. Bill Wallace, Ms. Marci Daugherty, Ms. Amanda Burroughsの他, アラバマ大学English Language Instituteの皆様には本学学生ならびに引率教員のために多大なご協力を賜りましたことに御礼申し上げます。また, これまでCCN学生来訪の際に多大なご協力をいただきました千葉県看護協会, ちば県民保健予防財団ほか多くの施設の皆様, 千葉大学医学部附属病院および同看護部の皆様, 本プログラム実施ならびにCCN・本研究科間の交流にご理解とご支援をいただきました歴代の看護学研究科長をはじめ教職員の皆様, 千葉大学看護学部後援会の皆様, 「交流協定校との海外学修プログラム」として助成いただきました千葉大学, そしてこのプログラムを立ち上げ, 無事に約20年にわたり継続に関わってきた故齋藤和子千葉大学名誉教授をはじめとするかつての精神看護学教育研究分野／専門領域教員の皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 岩崎弥生, 清水邦子, 石川かおり, 齋藤和子: 千葉大学看護学部－アラバマ大学間の国際交流. *Quality Nursing*, 8 (6), 2002.
- 2) 戸塚規子: 国際看護は異文化看護を包含する: 国際看護が扱う範囲について. *インターナショナルナーシングレビュー*, 32, 18-21, 2009.
- 3) 文部科学省: 「教育振興基本計画」 (平成25年6月14日閣議決定), http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afielddfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf (2017年9月28日アクセス)
- 4) 文部科学省: 「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」 (平成23年4月28日). 産学連携によるグローバル人材育成推進会議, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afielddfile/2011/06/01/1301460_1.pdf (2017年9月28日アクセス)
- 5) 高橋秀夫, 土肥充, Luke Haringtonほか: *English for Nursing Science* (CD-ROM 英語CALL教材). 千葉大学, 2014.
- 6) 野地有子, 小林美亜, 辻村真由子ほか: 平成24年度留学生交流支援制度 (ショートステイ・ショートビジット (SSSV)) による異文化看護 (Transcultural Nursing) プログラムの取り組み ショートステイ (SS) におけるアジア3か国の学生の受入れ. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 36, 33-37, 2014.
- 7) 野崎章子, 岩崎弥生, 大塚公一郎: 看護は文化にどう取り組んできたかー異文化看護・精神看護の立場から (特集 多文化間精神医学のブレイクスルー). *こころと文化*, 9 (2), 106-110, 2010.
- 8) 岩崎弥生: 看護系大学における国際化への課題について～実践例の紹介～ 留学生の受け入れ. JANPU 国際交流推進委員会企画研修会「看護系大学における国際コミュニケーション力の向上を目指して～先駆的な取り組みから学ぶ～」. 東京, 2017年3月